

平成 25 年 11 月 25 日

学位論文の要約

人間・環境学研究科 共生人間学専攻
高橋顕也

題 目：社会学的メディア理論の基礎 —システム理論と行為理論の総合の試み—
要 約

本稿の目的は、メディア (Medium/Medien) 概念を核とする社会学理論の概念的・方法論的な基礎づけを行うことにある。

社会学の諸理論の中でとりわけメディアという概念が中心的な役割を担っているのは機能主義的システム理論の伝統においてである¹。この概念を社会学理論の基本概念としてとり入れた T. パーソンズにおいては、メディア概念が術語として用いられるようになるのはその理論展開の後期になってからである。すなわち、AGIL の四機能図式を用いてシステムの分化する仕方を一般的に分析できるようになってから、全体システムから分化した 4 つの下位システム間の相互交換関係 (インプット - アウトプット) を記述するために、その交換媒体を示す概念として相互交換メディアというアイデアが導入されている (e.g. Parsons 1969, 1971, 1978)。したがって、メディア概念は当初から、機能主義的な分析枠組みおよびシステムという分析単位に従属するかたちで社会学理論へ導入されたのである²。

本稿の主要な対象である N. ルーマンの社会学理論においてもその基本的な事情は変わっていないが、彼の理論独自の発展過程がみられる。メディア概念はもともとパーソンズに倣って導入されているが (e.g. Luhmann 1972)、その後二度にわたって大きく拡充している。一度目は、行為システムからコミュニケーション・システムへの社会システム概念の変化に伴って、コミュニケーションの成立という観点からメディア概念が整理され、パーソンズに由来するメディア概念がシンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア (symbolisch generalisierte Kommunikationsmedien) として再定式化され、メディアの一般概念に包摂されるようになった (e.g. Luhmann 1984)。二度目は、形式 (Form) 概念とメディア概念が結びつけられることによってメディア概念が抽象化されル

¹ 例えば、パーソンズ以降の主要な社会学理論をほぼ網羅していると言ってよいヨアスラ (Joas & Knöbl 2004) においても、メディア (medium/media) という索引語で参照されているのは、パーソンズ理論、ルーマン理論、および J. ハーバーマースと A. ギデンスが彼らの機能主義的メディア概念に言及している箇所のみである。

² この点は 1 つのシステムごとに 1 つのメディアが配されていることからわかる。メディアの具体例を挙げると、社会システムの下位システムに対しては、貨幣 (経済)、権力 (政治)、影響力 (社会的共同体)、価値コミットメント (信託システム) が挙げられている。

ルーマン理論における基本的な概念の一つとなったのに伴い、シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディアにゼマンティック (Semantik) としての性格も含意されるようになったことである (e.g. Luhmann 1997a)³。したがって、ルーマンのメディア概念の展開には 2 つの特徴がある。すなわち、一方で、もともとパーソンズから借用したメディア概念の指示する範囲が、ルーマン自身の理論展開に合わせて独自に拡張しているということと、他方で、あくまでメディア概念は機能主義的システム理論の枠組みの中で、機能主義やシステム概念の意味するところがパーソンズとルーマンで大きく異なっているにもかかわらず、規定されつづけているということである。

本稿では、ルーマンによって拡張され再定式化されたメディア概念に、この機能主義的システム理論の軌を断ち切る展開可能性があることを示したい。そしてその展開の目標地点は、システム理論と行為理論を総合する視座の獲得である⁴。本稿ではメディアを分析対象とする社会学理論を構想することをとおして、最終的にこの視座の獲得が目指されているのである。

本稿は全 6 章からなる。各章ごとに全体の論旨を整理しておきたい。

本章次節では、本稿の主な検討対象となっている N. ルーマンのシステム理論の基本構成が整理される。特に 2 章以降の議論にとって関連性の大きな 4 つのテーマ、すなわち、システムと機能、意味、コミュニケーションと行為、およびコミュニケーションと意識がとりあげられる。この整理から全体的に明らかとなるのは、ルーマンの理論にとってその分析の出発となるのが操作という出来事であり、彼の機能主義的方法論もシステム概念もこの操作概念と密接に結びつくことによって、その独自性を得ているということである。

2 章「ルーマン理論におけるメディア概念の位置と可能性——『システムによる構成』から『システムの発生』をめぐる問題へ——」の目的は、操作上で閉じたシステムという構想によって特徴づけられるルーマンの社会理論において、「メディア」概念のもつ位置と展開可能性を描写することである。2 章ではシステム理論にとって本質的かつ決定的な問題であるシステムの同定という問題を取りあげる。まず、佐藤俊樹 (2000, 2005, 2008) による議論をシステム同定の問題を指摘し否定的に回答している典型的な批判としてとりあげ、そ

³ この論点については本稿 3 章で詳しく論じている。またルーマン理論におけるメディアの具体例は、論を進める中で必要な限り提示していきたい。

⁴ 本稿が出発点においている機能主義的システム理論の伝統において、システム理論と行為理論の対立と総合という問題領域は本質的である。ハーバーマス (Habermas 1981) が批判的に指摘しているように、パーソンズの理論展開は行為理論からシステム理論への重点移動、ないし行為理論のシステム理論への解消という軸で語ることができる。また、ルーマンは行為概念を (コミュニケーション・) システム概念の中にとりこみ、人間行為者をシステムの環境と捉え、行為理論とシステム理論の対立を解消することによって、まさにその対立に触れているとも言えよう。加えて近年、ドイツ語圏ではルーマンのシステム理論に拠って立つ論者と行為理論の擁護者との間である種の論争が起こっており、この問題領域の重要性をあらためて認識させている。なお、この論争において中心的な役割を果たしている行為理論が、本稿 5 章および 6 章でとりあげる H. エサーらによるフレーム選択モデルである。

の批判を再定式化し批判の前提を明らかにする。第二に、ルーマン理論において「システム」という概念が要請される理由を、「操作としてのコミュニケーション」から出発するという彼の理論構築の仕方において確認する。第三に、佐藤が提出した問題に否定的に答える立場をルーマン理論自身の視点で検証し、システム概念をめぐってルーマン理論に一種の難点があることを示す。最後に、ルーマンが自身の理論に導入した「メディア」という概念がシステム同定の問題にいかにして貢献するのかを論証し、システムの発生を説明することのできるアプローチの可能性を見出す。2章の結論は、ルーマンによって構築された社会システム理論の構成論的アプローチは予めシステム同一性を前提としており、社会的なものにつねにメディアが存在しているということから出発する発生論的アプローチによって補完されるべきだということである。

3章「シンボルによって一般化されたメディア概念のルーマン理論におけるモデル転換」では、2章で純粋に理論的にメディア概念の意義が導出されたのを補うかたちで、ルーマン理論の学説史的検証からメディア理論の意義を確認する。まず、シンボルによって一般化されたメディア（SGM）の概念にある3つの含意を確認する。すなわち、成果メディアとして、ゼマンティックとして、および媒質としてのSGMという含意がある。第一の成果メディアとしてのSGMという含意は、コミュニケーションの成立という観点から純粋に機能主義的に為されている規定である。第二のゼマンティックとしてのSGMという含意は、メディアそのものの構造に焦点を当てており、直接には機能主義的ではない規定となっている。対して、形式概念と組み合わせられた媒質としてのメディアという含意は、第一の成果メディアとしての含意と第二のゼマンティックとしての含意を総合した規定となっている。この結果、コミュニケーションから相対的に自立した媒質としてのメディアを論じる地平がルーマンの理論展開の中であつていられると評価できるのである。

4章「基礎的概念規定——形式・メディア・シンボルによって一般化されたメディア——」では、2章および3章で指摘されたメディア概念の可能性を積極的に展開するために、最も基本的な水準で、つまり基礎的概念について本稿独自の規定を行う。規定の対称としては、形式、メディア、およびシンボルによって一般化されたメディアの3概念を中軸として、差異性、同一性、単位、形式、相、区別、側面、指し示し、内側と外側、再参入、メディア、構造、意味、顕在性、潜在性、選択性、記号、シンボル、一般化といった諸用語がとりあげられる。ルーマン理論においてメディアは、その他の社会学理論と比較して、とりわけ中心的な役割を果たしているのみならず、最も洗練された概念規定を与えられているものの一つであると評価できる。そのため4章における概念規定もルーマン理論の用語系および概念構成に多くを依拠しており、部分的にはルーマン理論の再構成ともなっている。ただし、4章で展開される内容はあくまで本稿自身の主張に含まれるものであり、ルーマンの差異理論的立場とのみ排他的に結びつくものではない。この概念規定から明らかになるのは、メディアという対象に対するルーマンの差異理論的アプローチに対して、同一性理論的アプローチが可能であり、それが差異理論的アプローチと相補的な関係を築くことが

できるということである。

5章「フレーム選択モデル」では、システム理論と相補的な関係を築きうる同一性理論的＝行為理論的アプローチとして、H. エサーやC. クローネバークらによって展開されているフレーム選択モデル(MFS)の基本構成が整理される。まず批判的合理主義と方法論的個人主義というMFSの科学理論的立場を確認した後、MFSの3つの基本概念(効用最大化、状況の定義、および可変的合理性)と、MFSの基本的対象である3つの選択(フレーム選択、スクリプト選択、および行為選択)の規定因を整理する。また、MFSの独自性として説明対象となる行為規定の分析性をとりあげ、それがMFSの方法論的個人主義および因果的説明と整合性を得るために、可変的合理性というアイデアが導入されていることを指摘する。5章後半では、MFSとシステム理論の共通点が5つ挙げられる。すなわち、行為規定の自律性、ミクロ的基礎づけ、ミクロ-マクロ・リンク、意味の二重の選択性、および記号やシンボルの重視である。これらの諸点は密接に関連しあっており、その全体像から両理論の社会学理論としての共通志向がうきあがってくる。すなわち、両理論はともに、ミクロ水準の観察可能な経験的出来事としての行為の成立を社会学の一般理論の1つの出発点として、その成立に対する記号やシンボルの本質的な役割に注目し、その出発点からマクロ水準の社会秩序の成立までをも分析対象として包摂しようとする志向である。ここで指摘された共通志向から、両理論に社会学理論としての接点があり、比較可能性が存在するということが指摘される。

6章「社会学理論における総合の諸問題——システム理論と行為理論——」では、本稿がこれまで主要な批判対象としてとりあげてきたルーマンのシステム理論と、それと相補的な関係をとろうと考えられる行為理論であるMFSの両理論の比較と関係づけが課題となる。まず、両理論が具体的にどのように相補的な関係を築きうるのかが、コミュニケーションと行為、意味概念、方法論、合理性概念の諸点にわたって検討される。つづいて、本稿の主たる対象の一つであるシンボルによって一般化されたメディアに対して、相補的な関係にある両理論がとりうるアプローチの仕方を明らかにし、これまで考察してきた理論的総合の可能性を応用することができる領域として機能分化という問題領域が指摘される。